



めっき・表面処理業の総合メーカー・スズキハイテック(株)が同業大手と共同出資しメキシコに進出。このほど自動車部品のめっきを開始した。中国市場での営業活動にも力を入れている。東北で最初にめっき業を立ち上げ102年。ハイテク部品の心臓部を支える確かな表面処理技術と、同業社との協力関係を構築し、積極的に海外展開に取り組む同社の歩み、グローバル時代下における経営方針を、鈴木喜代壽取締役会長(写真左)と鈴木一徳代表取締役社長に聞いた。

—経済産業省の2016年版「はばたく中小企業・小規模事業者300社」に選ばれました。受賞の理由となった海外展開・メキシコ進出の背景と経緯について鈴木社長にうかがいます。

鈴木一徳社長 動き始めたのは2014年2月です。それまで3年間、東南アジアを視察しておりましたが、顧客の紹介でアメリカ、メキシコの自動車部品メーカーが当社を訪れて、進出を持ち掛けました。早速、現地に飛び視察。競合他社が少ない上、自動車輸出に関税のかからないアメリカ市場も狙えるメキシコへの進出を決断。既に同国への進出を決めていた愛知県刈谷市に本社のある自動車めっき大手のサーテックカリヤ社へ共同出資を打診し、現地法人「サーテック・スズキテクノロジーメキシカーナ」の設立となりました。

メキシコ中部のサンルイスポトシ州の工業団地約4万500平方メートルの敷地に、鉄骨平屋約6,800平方メートルの工場を建設し、エンジンやトランスミッションといった部品の「無電解ニッケルめっき」など7種類の表面処理ラインを整備しました。サーテックカリヤ社はトヨタ系、我が社はホンダ系の自動車部品メーカー

と主に取引しており、新規顧客の獲得といった面で相乗効果が得られます。また、同社はメキシコを含む9カ国に進出しており、海外戦略を学ぶ機会ともなります。

### 3つの大きな危機に直面 リスクに備え財務を強化

—100年を超える歴史の中で幾多の困難に遭遇したと聞きます。

鈴木喜代壽会長 3つの危機がありました。1973年のオイルショックでは大型公共事業が凍結・縮小され、売上の半分を占める電話・通信機器の受注がゼロになり、半分の希望退職を募り打開を図らなければならない状況に陥りました。さらに、父が脳梗塞に倒れ、看病疲れから母が亡くなるなど、悪いことが立て続けに起こりました。

2008年のリーマンショックでは7割ほど仕事が減り、オイルショック時に匹敵するほどの状況でした。当時、私は全国鍍金工業組合連合会(ぜんとれん)の会長をしており、雇用調整助成金の拡充と活用を奔走しました。国が給与の6割を補ってくださったことで、何とか雇用を守ることができましたが、1,800社あった同業社が1,400社に減少しました。そして、2011年3月11日の東日本大震災。東北・北海道表面処理組合の工場は、津波により壊滅的な被害を蒙りました。当社においても利益こそ確保できたものの、サプライチェーンが寸断され大きな影響を受けました。—3つの大きな危機から得た教訓は。

鈴木会長 山形工業高校、法政大学を卒業し帰郷後、最先端のめっき技術を学ぶため上京し(株)高岡、(株)東平鍍金、(株)大森クローム工業の門をたたきました。夜は東京鍍金学校に通いました。従って技術に関してはだれにも負けない自信がありました。経営となると…。「会社は経営者、社員が困難に際して我慢することができれば継続する」と確信したものの、オイルショック時の金融機関とのやりとりを通じて、「しっかりと財務をやるのが経営者の責任である」ということを、身を持って知りました。利益の貯蓄を重視し自立した経営に踏み出すきっかけとなりました。

また、これは全鍍連の若手経営者にも話しているのですが、「人とのつながり」「利益の共有」「リスクへの備え」を重視してほしいということです。人ノ

とのつながりについては、今回のメキシコ進出に際して共同出資を受け入れてくれたサーテックカリヤ社と長年にわたる経営者同士の交流が機縁となりました。また、顧客のみならず、社員と利益を共有することが大事です。会社の財産は苦楽を分かち合う人材ですから。そして何よりも財政基盤の確立です。東日本大震災のような予期せぬリスクへ対応するため、危急存亡資金(通増定期保険)等を心掛けることです。その上で若手経営者に強調したのは、「常にポジティブに行動する」「誰々のせいだなどと愚痴を決して言わない」。困難に遭遇した時は、「これは神様から与えられた試練なのだと割り切ってしまう」という覚悟です。30代で責任者となり「経営の素人」からスタートした私の実感です。

### 行動しなければ未来はない 若い世代の挑戦をサポート

—今後の方針についてあらためてうかがいます。

鈴木社長 国内(山形)で生き残るには海外にも軸足を置かなければなりません。今回、メキシコに進出しましたが、2012年にはスマートフォンを製造している中国の大手部品メーカーと提携していますし、昨年10月には当社独自の営業担当者が中国に常駐、自動車部品のめっきを仲介するビジネスを展開しています。山形大学の留学生の中国人、ボリビア人を採用し、中国、メキシコそれぞれに派遣しています。一方、国内においても山形県企業振興公社の紹介で経験豊富な人材を採用、営業専門チームを立ち上げました。自ら行動しなければ未来はない、と思っています。

鈴木会長 1914(大正3)年、祖父喜三郎が東京でめっき技術を学び、山形市上町の正徳寺近くで鈴木めっき工場を創業しました。当時は仏壇金具の銅めっきを主に手掛けていたようです。1944(昭和19)

年、現在地(銅町)に移転しました。めっきは大量の水を必要としています。銅町は蔵王山系の地下水が1時間に45トンを排出するほど豊富です。

しかし、戦時下の統制経済が厳しくなる上、祖父が37歳で死去。満州に渡って一家を構えていた父喜次郎が後を継ぐため帰郷したものの、その年の7月応召されました。父はフィリピン・ルソン島に輸送される途中、南シナ海で撃沈され、木材につかまり洋上を漂流しているところを米駆逐艦に救出され九死に一生を得ました。常々、「4,000人の部隊で生き残ったのはわずか1割。撃沈されずにルソン島に上陸していたら死は免れず、満州から帰国しなければシベリアに抑留されていた。運が良かったとしか言いようがない」と語り、助かった8月1日を創立記念日としました。そうした創業者たちの思いを大切にしたい。同時にグローバル化の時代にあつては、変化に対応し、生き残りを掛けて絶えず挑戦し続ける若い世代の行動力が不可欠です。私はそのサポート役に徹します。

### スズキハイテック(株)

本社・山形市銅町2-2-30。創業1914(大正3)年。エレクトロニクスや自動車産業分野を支えるめっきを主とする表面処理技術に定評。ナノレベルの技術開発により最先端の製品をめざす。定量分析に代表される化学研究設備から表面処理作業部門まで一貫した品質保証体制と環境対応技術を実現。資本金6,900万円。

(写真はメキシコの新工場「サーテック・スズキテクノロジーメキシカーナ」)

